

「冬虫夏草展」について

泉川康博・木原靖正・金丸恵子*・北野俊二*

はじめに

冬虫夏草とは、本来はチベット高原やヒマラヤ地方の高山地帯に生息するオオコウモリガの幼虫に寄生する1種の菌類シネンシス冬虫夏草のことを指し、漢方などに使用されることで有名である。日本においてはシネンシス冬虫夏草の自生が無いと、様々な昆虫やクモなどに寄生する数百種の菌類を、広義に冬虫夏草類あるいは虫草と呼称している。これらは発生時期が限られているうえに、対象物が小さく、土中から丁寧に掘り上げないとその全体の姿を見ることは難しく、一般には認知度の低い生物である。

当園では、毎年秋に開催する「野生きのこ展」において、キノコに混じって数点程度の冬虫夏草類が展示されることはあったものの、冬虫夏草類を主要なテーマにした展示会を開催したことは、これまで無かった。

平成28年に、瀬戸内虫草団の団員が植物公園内を調査したところ、クモタケを中心に数種の冬虫夏草類が生息していることが明らかになった。瀬戸内虫草団は、平成21年に安佐動物公園において冬虫夏草展を開催した実績がある。それ以降、瀬戸内虫草団では新たな写真や標本の収集をしており、これらを発表する機会としたく、園内観察や冬虫夏草類に関する講演会と組み合わせた展示会を植物公園で開催したいとの意向が寄せられた。

そこで、当園では瀬戸内虫草団との共催で冬虫夏草の展示会を開催する方向で検討に入った。

展示時期の検討

冬虫夏草類の発生は、6月下旬～7月上旬頃が最も多く、展示会の会期中に野外観察会を実施したいことから、会期は平成29年6月17日(土)から8月17日(木)までとした。これに伴い、前年度の同時期に開催した「私の好きな花たちの写真展」を、当年度は冬季開催に変更した。

関連イベントについて

企画当初から、講演会の演者として、冬虫夏草についての著書があり知名度の高いゲッチョ先生こと盛口満氏を推す意見があり、冬虫夏草

類の発生が最も多いと推測される時期に園内観察会と講演会を組み合わせた終日のイベントを開催することとした。また、展示期間が長期にわたるため、別の日にも瀬戸内虫草団の団員による園内観察会を開催することとした。

広報について

2ヶ月にわたる展示会ということで、両面カラー刷りのチラシを8,000枚作製し、市内の公共施設や中国地方の類似集客施設などに配布した。またホームページのトップページにバナーを設置し、チラシの電子版を掲載した。市民と市政への掲載は、紙面の都合で叶わなかった。

展示内容について

冬虫夏草類を100種紹介することとし、種ごとに1枚ずつのパネルを作製した。標本がある種については、標本箱をパネル下部の壁面に固定することで盗難防止措置を図ったうえで展示することとした。その他不明種や新種の話題などのパネルも作製した。また、両面刷りした展示一覧を作製し、展示室入口で配布することとした。



写真1 冬虫夏草展の入口



写真2 展示室内の様子

*瀬戸内虫草団

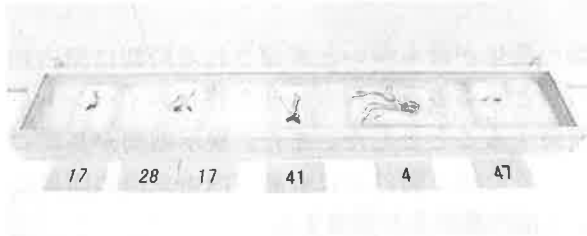


写真3 標本箱に収められた冬虫夏草

お子様にも楽しんで観覧していただける工夫として、落葉と朽木を使ったオブジェを作製した。このオブジェの中に冬虫夏草の絵柄をプリントしたもの隠して、「15種類の冬虫夏草が隠れています。全部見つけられるかな?」と表示をつけ、探す楽しみを体感していただいた。



写真4 冬虫夏草探しコーナー

また、冬虫夏草の生態が分かる精密な模型を2点設置した。特にオオセミタケの巨大模型は異彩を放っており、人目を引いたようだ。

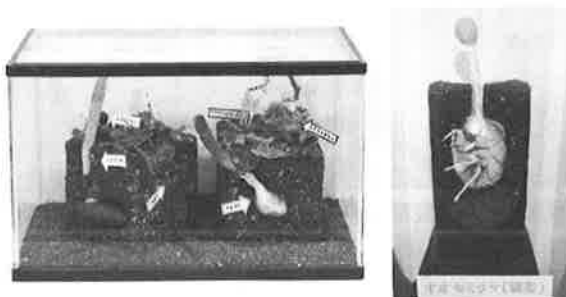


写真5 6種の冬虫夏草の生態模型(左)とオオセミタケの巨大模型(右)

講演会と園内観察会(1回目)について

6月25日(日)に、ゲッチョ先生こと盛口満氏を招聘し、10時から「不思議のキノコ 冬虫夏草」と題した講演会、13時から「ゲッチョ先生と冬虫夏草を探そう in 植物公園」と題した観察会を開催した。前日から雨が降り続いて天候が心配されたが、当日は雨も止み、ときおり日が差す陽気となった。講演会にはお子様連れの

家族からご年配の方まで幅広い層が集まり、73名の方が参加し、先生の用意した興味深いスライドショーに引き込まれるように聞き入っていた。終了後、数名の参加者から活発な質問があった。



写真6 ゲッチョ先生の講演会の様子

昼食をはさみ、午後の観察会は52名の方が参加した。曇っていたが、雨が降り出すことはなかった。空梅雨で冬虫夏草の発生状況が悪いことが危惧されたが、前週の雨で急に発生が促されたようで、思ったより多くの冬虫夏草の発生を確認できた。ツバキ園ではクモタケ、カエデ園ではクモタケ、ハチタケ、ハナサナギタケ、アワフキムシタケの4種を確認できた。ゲッチョ先生の冬虫夏草掘りの実演では、多くの参加者が見入っていた。



写真7 ゲッチョ先生による冬虫夏草掘りの実演

園内観察会（2回目）について

7月9日（日）に、瀬戸内虫草団の団員で、日本冬虫夏草の会理事でもある東勇太氏を講師として、「冬虫夏草を探そう in 植物公園」と題した観察会を開催した。10時には雨が降っていたが、大テントで事前説明をし、出発する時には雨が止んだ。梅雨後半は雨が降る日が多く、冬虫夏草の発生には良い状況であった。クモタケが多く見つけることができた。東氏はコガネムシの仲間の幼虫から発生する緑色の珍しい冬虫夏草を見つけた。新種である可能性が高く、ミドリコナコガネムシタケ（仮称）とした。子どもの参加者も多く、楽しく観察や採取することができた。次回行なう場合は、掘る物（スコップ等）があれば良いと思われた。



写真8 東勇太氏による冬虫夏草の解説



写真9 ミドリコナコガネムシタケ（仮称）

総括

開催期間中の入園者数は、25,682人であった。特に6月17日以降の6月の入園者数は、前年より1,074人増の4,606人で、本企画による入園者

増の効果が見られた。一方、7月の入園者数は4,059人減の11,389人、8月の第3木曜日までの入園者数は2,296人減の9,687人であり、サマーフェア期間中の大温室閉鎖の影響によるものと思われた。

一方、講演会や園内観察会の参加者数はこの時期のイベントとしては多かったのですが、万人向けとは言い難いテーマのイベントではあったが、開催意義はあったように思われる。

具体的な展示方法では、それぞれの種名毎にコメント、説明を入れた方がよかった、テルオモルフとアナモルフが揃う場合は、並べて展示してもよかった、展示期間が長い場合は、前期・後期で展示替えを行うほうが良かった等の意見が出た。また、観察会の後、残っていた新種が掘り取られていたので、観察会をするなら園内での採取は特別な場合を除き、原則禁止を参加者に徹底して伝えるべきであった。

広報関係では、瀬戸内虫草団が独自に取ったアンケート結果を見る限り、チラシ配布が最も効果が高く、次にホームページへの掲載と続くが、市民と市政にイベント情報を掲載できなかったことや、マスコミ等の取材が無かったこともあり、後半の入園者数が今ひとつ伸び悩んだように思われた。

今回の観察会では、ミドリコナコガネムシタケ（仮称）を発見しており、アマチュアでも新種を見つけられる可能性がある分野であることが改めて裏付けられた。より多くの市民の方に冬虫夏草類に興味関心を持っていただきたく、次年度以降も園内や園外での冬虫夏草観察会を企画していきたい。